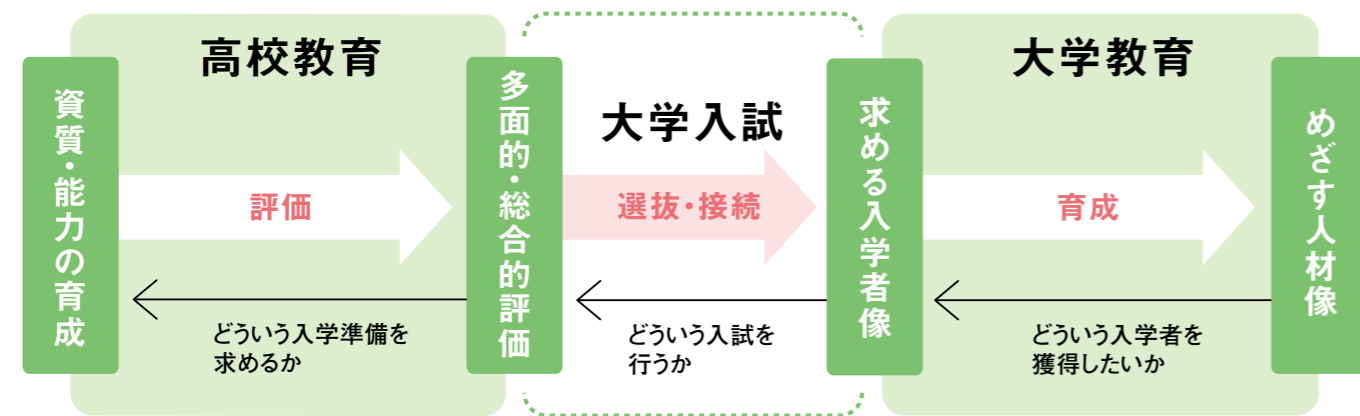


大学入試で高校教育と大学教育をつなぐ～高大接続の流れ図



よい人生を送るか(学びに向かう力・人間性等)という「資質・能力の育成」を一体的に行う教育改革が進んでいます。このような高校教育の成果を大学で十分に生かすためには、「多面的・総合的」に受験生を評価することが必要です。その意味で知識・技能だけでなく部分的にしか受験生を見ないことは、もったいないことだと言えるかもしれません。

入試に対する考えは、学部・学科や人によって大きく異なるため、検討が進まないケースもあると思います。その際は、「入試をどう変えるか」の前に、「どのような入学者を獲得したいか」について考えることをお勧めします。求める入学者像というゴールイメージから検討を始めるのです。

まず、現状の入学者の分析を行い、どの入試でどのような学生が入学しているのか、入試方式別の入学者像を把握します。そして、今後どのような入学者を増やしたいのかを明確にするために、自学の教育で伸びている学生はどのような学生なのかを把握します。現状の入学者をどう変えていきたいかが具体的になれば、入試をどう変えていくとよいかを検討しやすくなります。

経営に関わる現実的な面を考慮



入試改革で

「選抜」から「教育の接続」へ

# 変えること

入試改革とは結局、何を变えることなのか？  
ここまで見てきた高校現場の変化や  
先行大学の事例をふまえ、  
ここからは、改革を進めるにあたっての  
具体的な観点を提示していきたい。

OPINION

## 入試改革で教育の リデザインを



(株)進研アド  
Between編集長 中村浩二

なかむらこうじ ● 1990年(株)福武書店(現ベネッセコーポレーション)に入社。高校事業部に於いて高校の教育改革支援に携わった後、(株)進研アド九州支社勤務を経て現職。

### 入試改革の目的は 人材育成にある

変化が激しく、将来が不確実な社会を生き抜く人材を育てるために、高校教育、大学入試、大学教育を三位一体で変えようとしているのが、今行われている高大接続改革です。そのため、入試は高校と大学の人材育成をつなぐ「架け橋」であるとの認識を持って改革に臨むことが肝要です。

今回の入試改革では、外部英語検定試験や記述式問題の導入など、受験生の負担は増す傾向にあります。また、主体性等の評価については、実施に関して多くの課題が高校、大学関係者から指摘さ

れています。

これらの課題があるにも関わらず入試を変えるのですから、人材育成につながる改革にすることは絶対に外せません。高校側は入試の背後にある各大学の人材育成方針に注目しています。それは、高校での教育改革の成果を生かしてくれる大学はどこかを見ているからです。入試改革を進めるにあたっては、まずはその目的が人材育成にある点を学内で共有しておくことが必要でしょう。

### 入学者像から 入試を検討する

高大の教育をつなぐ入試にするためには、高校教育の成果を大学側がしっかりと受け止め、教育によって発展させ、めざす人材像へと育てていく、という流れを意識する必要があります【左上図表】。

高校では、①わかったこと、できること(知識・技能)を②活用して(思考力・判断力・表現力等)、③どのように社会と関わり、より

することも大切です。入試は学生募集に大きく関わることで、併願大の動向に注意しつつ、自学ならではの特色を盛り込んだ入試を少しずつ取り入れるようにします。検証→改善のPDCAを回しながら入試を育てていくといでしょう。

### 自学の学びに対する 準備度を高める入試へ

実質倍率が低く選抜性に欠ける大学の場合は、入試を多少変えたところで入学者は変わらないと思いかもかもしれません。その場合は、「選抜」ではなく「接続」という視点で入試を考えてみてはいかがでしょうか。単純に資質・能力の高さで受験生をふるいにかけるのではなく、入試を通して自学の学びに必要な資質・能力を示し、それを高める意志を持つ受験生、いわば準備が整った受験生を受け入れるのです。

P.10-13で紹介した4大学は、それぞれ「接続」を意識した入試を行っています。鎌倉女子大学は入学後の学修に対する抱負をプレゼンさせ、千葉商科大学はアクティブ・ラーニングに必要な素養を評価しています。北陸大学では大学で育成するマネジメント力に必要な資質・能力を評価し、追手

門学院大学では独自のプログラムを通じて大学で学ぶ意義を考慮する機会を設けています。いずれも募集は好調です。

こうした「接続」型の入試が高校生から支持を得る理由は、入試を通して入学後の「自分の成長した姿」をイメージしやすいからではないでしょうか。「接続」型入試の受験者は「これは、自分の強みや志向性が生かせる自分のための入試だ」と思っています。

そして、「この大学なら入学後に入試で問われた力を生かして学べる」と、自身の成長に期待するようになるのです。

「接続」型の入試は、教職員の意識も変えていきます。多面的に評価することで、教職員が学生を複眼的に見るようになります。学生一人ひとりの成長に対する関心も自ずと高まります。

入試で変えることができるのは入学者です。入学者が変われば大学の教育は変わります。つまり入試改革は、大学教育を考えることなのです。決して入試部門だけの話ではありません。入試実施面での負担は増しますが、教育の改善、そして学生募集への好影響が期待できることを考えれば、入試改革に取り組む価値は十分にあると言えるでしょう。